

ペティとカンティロン
——前古典派における社会会計と階級——

金子 創*

I はじめに

アダム・スミスは『諸国民の富の本質と原因にかんする研究』（以下、典拠として示す場合には *WN* と略記）で経済の挙動を記述する場合に、地主と労働者、そしていわゆる資本家といった階級構造を前提とした。今、スミスの「自然価格」（*natural price*）を典型的な生産費説の体系として解釈する。そこでは、ある財の生産工程において 3 階級にそれぞれ所有される生産要素、土地、労働および「資本」（*capital*）が用いられ、またそれぞれに対応する報酬として地代、賃金および「利潤」（*profit*）が分配される。このとき、その財の価格はそれぞれの報酬の総和として定まる（e.g., Schumpeter 1954, 557–61; 訳 中, 334–43; Meek 1967, 18–22; 訳, 25–31）。

こうしたスミスの自然価格に関する解釈として、たとえば, Hollander (1987, 61–72; 訳, 73–87) の教科書的な 2 つの区別が存在する。すなわち、(1) 商品に体化された労働量によって規定される長期価格の決定問題および (2) 指標としての「労苦と骨折り」（*toil and trouble*）の問題、である。(1) はリカードウによっていわゆる「投下労働価値説」として精緻化されうる側面であり、スミスの階級構造や競争環境を前提とし、特定の生産技術条件の下で相対価格が相対的投下労働量によって近似できることを明らかにするという方向性を含意した。それに対して、(2) は「支配労働」の単位としての性質に関する側面である。これは、労働が国民所得あるいは個人所得の適切な指標（の 1 つ）であり、またそれが指標として何らかの普遍性を持つ、という観点の伝統をもたらした。ここでも、一般には必ずしも労働が指標として選択されるとは限らないという意味で、その背後には階級に関する認識がやはり前提とされていた、と解釈しうる。

ところで、スミスはたとえば「労働の賃金が上昇すると、賃金となる価格部分が増加し、多くの商品の価格が必然的に高まる」（*WN*, 104; 訳 I, 147）と述べたが、この記述は、スミスにおいてはそれぞれの生産要素に対する報酬水準の決定を通じて財の価格が決定されるという因果関係が強調されていた、と解釈

* 慶應義塾大学経済学部

しうる (e.g., 根岸 1997, 39). もしこうした記述に着目するのであれば, 自然価格の解釈として (3) 価格決定に先行する (スミスの) 各階級への分配や経済循環の様相の問題, が本質的ということになる (cf. Hicks 1983; 丸山 2011, 113–35). なお, これは上の 2 つの区別とは異なる解釈であることに注意されたい. 実際, (3) は価格決定に関する記述であるため (2) とは独立であり, また価格決定の記述であるとは言え (1) の想定していない因果関係を含むという点で区別される.

(1) – (3) のいずれの側面を解釈するのであれ, 経済分析において一般にスミスの階級構造を前提できるとは限らず, 歴史的にも古典派以外に同様の想定がなされていたかは自明ではない. 本研究では, スミスないし古典派的な認識をベンチマークとし, スミスに先行する諸学説にさかのぼるが, (1) – (3) の観点からそれぞれの学説の特徴を検討することで, それぞれが社会, とりわけ階級構造に関してどのような認識にもとづいて概念を構成したかを解釈する. それにより, 階級構造や経済循環に関する想定の違いが存在したか, そしてその違いが (存在したとして) 主に価格の説明の仕方の違いにどのように対応しているか, を明らかにする. こうした文脈においてはペティ (William Petty, 1623–87) とカンティロン (Richard Cantillon, c. 1680/90–1734) との比較が興味深い. 両者は共に「内在価値」 (intrinsic value; valeur intrinsèque) 概念を用いた. より詳細には, ある財の生産工程において土地と労働とが生産要素として用いられることを想定し, それら 2 要素の間に「平価」 (par) と称する関係を導入することで, その財の土地あるいは労働の単位で表される価格を定義した. 以下では, それぞれの価値・価格概念を特に (c) の観点にもとづき検討する.

II 価値の計算手続とその前提

よく知られるように, ペティは, 『租税および貢納についての一論文』 (A *Treatise of Taxes and Contributions*, 1662; 以下, 典拠を示す場合には *Treatise* と略記) において, 財の生産に関して「土地が富の母であるように, 労働は富の父であり, その能動的要素である」 (*Treatise*, 68; 訳, 119) と記述した. カンティロンもまた『商業一般の本姓に関する試論』 (*Essai sur la nature du commerce en général*, 1755; 以下, 典拠を示す場合には *Essai* と略記) の冒頭において, ペティを想起させる「土地はそこから富が引き出される源泉, あるいは素材である.

人間の労働はその富を生み出す形式である」(*Essai*, 1; 訳, 1) という主張を述べた。実際、両者は(スミスとの対比という点で)生産における資本概念の役割を明示しておらず——ただし、カンティロンについては論争の余地が残る (cf. Aspromourgos 1996, Chapter 9; 金子 2012) ——, 生産要素として土地と労働を強調した, と解釈しうる。こうした前提の下, それぞれは土地と労働の間の「平価」の存在を仮定し (*Treatise*, 44–45; 訳, 79; *Essai*, Partie 1, Chapitre 11), 財の価値の表示単位に関して, ペティは貨幣単位や労働量に (*Treatise*, 50–51; 訳, 89–90), カンティロンは土地量に求めた (*Essai*, 24; 訳, 28)。

ところで, 今の観点からは, 土地と労働, それぞれの所有者階級の役割が価値決定の議論にどのような作用を持ちえたかが興味である。以下では説明の便宜上, 先にカンティロンについて検討する。カンティロンは, もっとも極端な事例として, 1人の地主が所有する土地量および稼働可能な労働者(農夫, 職人, 監督など)を所与とし, その地主自身の好みにもとづき生産を計画する状況を考察した。ここで, その計画の下で実際に稼働する労働者および計画の実行に必要な中間投入財を再生産し, また総産出からそれらの再生産分を差し引いた残余として自身の好みを達成する (*Essai*, 33–34; 訳, 40)。もちろん, カンティロンはこうした描写は現実の経済そのものではないことを十分に認識していたと考えられるが, 他方でこうした極端な事例によって経済の本質的な要素を描写可能であるととらえていた。実際, カンティロンはより一般の市場的な交換を含む経済についても地主の好みの主導的な役割を強調した (*Essai*, 24; 訳, 28–29)。カンティロンの平価は, こうした地主の主導的な分配を前提に定義されており, その限りでは所与の生産技術の下で労働者への分配率データから財の内在価値を計算しうる (e.g., Aspromourgos 1996, 81–82; Kaneko 2012)。

ペティにさかのぼると, 一方で地代の決定に関して, カンティロンと同趣旨の説明をした。すなわち, 「仮にある人が自身の手で一定面積の土地に穀物を栽培可能であるとしよう。…この人が自分の収穫から自分の種子を差し引き, また同様に自身の食べたもの, および衣類その他の自然的必需品と交換に他人に与えたものを差し引いたとき, なおそこに残る穀物は当該年度のその土地の自然的な真実の地代である」(*Treatise*, 43; 訳, 76)。他方で, カンティロンのように分配機構としての地主の役割を想定しなかった。実際, ペティの用語法は相対的に曖昧であるが, カンティロンのように特定の仮想的な分配機構の下で定

義されるような値であったとは思われない。「土地の内在価値」に関して地代の時系列データから何らかの中間的な値を推計しうると考えたし、また豊作、凶作などによって生じる偶発的な変化の推計にも興味を示した (*Treatise*, Chapter 5). こうした問題意識は特定の分配機構を仮定することを本質的に必要としない。ペティ (*Treatise*, 90; 訳, 155–156) は生産過程において、少なくともカンティロンの分配機構の下では想定しえないような、「もぐりの業者」(interloper) の過剰に存在する可能性を許容し、その下では「自然的根拠にもとづいて計算された、真実の政治価格」が高い値で推計されるとした。

III 学説史上における位置づけ

たとえば伊藤 (2000) によれば、「内在価値」という用語は (ペティやカンティロンから離れば), 元来, 貨幣の鑄造や名目価値に関する論争の文脈で何らかの意味での適正価値を意味し, 特に貿易や債権者・債務者 (地主・借地農) 関係についての認識と関連した。ここで伊藤 (2002, 61–62) は, こうした貨幣価値に限定された文脈での用語法と, 財一般についての価値の表現に拡張された, いわゆる価値論史的に評価しうるペティ以降の用語法とを異なる系譜として位置づける。しかし, 内在価値の意味がペティやカンティロンによって財一般の価値を表示する用語法に拡張された後にも, 依然として階級的な社会関係についての認識と関係していた, と解釈しうる。実際, 本研究で対象とするペティおよびカンティロン, それぞれの内在価値の定義は互いにほとんど類似した記述であったとは言え, それぞれの背後に存在する階級の役割に関する認識の相違に対応して価値の構成の相違が存在していた, と考えられる。こうした対比の下では, 前古典派の一局面においてそれぞれの階級構造についての認識の相違が価値や価格の構成の仕方に本質的であり, そうした概念規定がどういった経済分析を可能にしていたか, という評価を可能にする。

本研究では, ペティやカンティロン, それぞれの体系における概念の定義やそこで前提となっていると考えられる社会についての認識の間関係について考えている。学説史上において, それぞれの学説の理論的な構造に着目する場合, しばしば類似的な用語法や記述をもってそれらの共通性が強調されるが, 場合によってはまったく異なる社会認識を表現する記述が結果的に類似していたに過ぎないこともありうる。したがって, それぞれの学説の理論的構造の歴

史的な位置づけを精確に与えるためには、一見類似する記述であっても、それらを背景に存在しているであろう認識との対応関係について評価する必要がある。本研究は、そうした認識と経済分析の枠組みの関係について、階級と価値・価格概念の構成との関係を一例として考察する。

参考文献

- Aspromourgos, T. 1996. *On the Origins of Classical Economics: Distribution and Value from Petty to Adam Smith*. New York: Routledge.
- Cantillon, R. 1755. *Essai sur la nature du commerce en général: traduit de l'anglais*. Reprinted by Institut National d'Études Démographiques. Paris. 1952, 1–175. [Essai]. 津田内匠訳『商業試論』所収, vii–xii, 3–211. 名古屋大学出版会, 1992.
- Hicks, J. 1983. The Social Accounting of Classical Models. In *Classics and Moderns*. Vol. 3 of Collected Essays on Economic Theory. Oxford: Basil Blackwell. 17–31.
- Hollander, S. 1987. *Classical Economics*. Oxford: Basil Blackwell. 千賀重義・服部正治・渡会勝義訳『古典派経済学——スミス, リカードウ, ミル, マルクス』多賀出版, 1991.
- Kaneko, S. 2012. Cantillon on Value: a Rational Reconstruction of the Roles of Landownership. KES Discussion Paper Series, Graduate Student No. 12–1. Keio University.
- Meek, R. L. 1967. *Economics and Ideology and Other Essays: Studies in the Development of Economic Thought*. London: Chapman & Hall. 時永淑訳『経済学とイデオロギー——経済思想の発展にかんする研究』法政大学出版局, 1969.
- Petty, W. 1662. *A Treatise of Taxes and Contributions*. In Vol. 1 of *the Economic Writings of Sir William Petty*, edited by C. H. Hull. Reprinted in the Collected Works of Sir William Petty. London: Routledge / Thoemmes Press, 1997. 1–97. [Treatise]. 大内兵衛・松川七郎訳『租税貢納論』所収, 13–164. 岩波書店, 1952.
- Schumpeter, J. A. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 中』岩波書店, 2006.
- Smith, A. 1776. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. In Vol. 1 of the Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, 2, edited by R. H. Campbell, and A. S. Skinner. Indianapolis, Indiana: Liberty Fund,

1981. [WN]. 大河内一男監訳『国富論 I』中央公論社, 1978.
- 伊藤誠一郎 2002. 「17-18 世紀の貨幣価値論の系譜について——貨幣の内在的価値をめぐって」『経済思想にみる貨幣と金融』所収, 61-82. 三嶺書房.
- 金子創 2012. 「カンティロンの「利潤」概念——「内在価値」および「企業者」との整合的解釈を通じて」『経済学史研究』54 (1) : 83-101.
- 根岸隆 1997. 『経済学の歴史 (第2版)』東洋経済新報社.
- 丸山徹 2011. 『アダム・スミス『国富論』を読む』岩波書店.